
東プリン大震災

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東プリン大震災

【Nコード】

N6408R

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

続くかどうかまだわかんないので、一応、連載にしておきました。

東プリン地方で、大規模な震災が起こった。

新村辰夫は、非正規労働者。工場に勤務していたが、倉庫で隠れて小説を書いていたら、閉じ込められてしまった。

「ううう。真っ暗だし、寒いし狭いし、やばいな」

壁をどんどん叩いても大声で叫んでも反応なし。

「だめだ」

ひとまず、嘆いていても仕方がない。救助を待つしかない。頼みの綱のケータイは潰れてしまっている。

辰夫は暗くてメモがとれないので、床に横になり、頭の中で、小説のアイデアを練る。とにかく、辰夫は早くプロ作家にならないといけない。非正規労働は、低賃金で結婚できない。子作りもできない。辰夫も今日が誕生日で、35歳である。待ったは許されない。

腹はへるが、小説のことを考えてると、精神的にだいぶ持つ。

ふと、20代の頃、数年間の引きこもり時代を思い出す。あの頃は、何の希望もなく行く当てがなく部屋に閉じ込められていた。

今も閉じ込められている。しかし、あの時とは違う。小説家になるという希望がある。それだけが、救いだ。

「こっから出たら、絶対にプロ作家になるぞ」

辰夫は、必死になってアイデアを練った。明かりが欲しい。メモをとりたい。原稿用紙に書きたい。

大学時代に好きだった女の子の顔が突然頭に浮かんだ。

辰夫は、その女の子と、デートしたり、ケンカしたり、キスをしたり、食事をしたり、海で泳いだり、そんな小説を頭の中で描き始めた。

「うへへへへ。美津子ちゃん。うふふふ。楽しいなあ。いひひひひ

ひ」

その後、救助は間に合わなかった。自衛官が発見した時、辰夫はすでに死んでいた。

不思議と嬉しそうな顔をしていたという。

2

辰夫は、閻魔様の前に来ていた。閻魔様はむちゃくちゃでかい。十メートルくらいある。これまたでかい机に座り、書類を眺めている。

「ふむ。新村辰夫。震災の犠牲者か。天国でいいかね」
鬼がすかさず答える。

「しかし閻魔様。辰夫は仕事をさぼって小説を書いていたから閉じ込められたんです。天国ではないでしょう」

「では、地獄か」

「いや地獄というのかわいそう」

「どうせえちゅうねん！」

辰夫は、いったいオレどうなるのかなと不安でならない。

「幽霊にしますか」

「ほう」

結果、辰夫は、幽霊になることになった。地獄に行かないで済んだのは嬉しいが、しかし、辰夫はプロ作家になりたいだけである。幽霊になっても別に嬉しくない。

しかし、一つだけ嬉しいことがあった。

「うひひひ。今日はりんご湯に行こう」

誰からも見られないし、壁とかをすり抜けられる身体なので、女湯で女の裸見放題なのだ。

「……………」

おばあさんしかないない。おばあさんの垂れ乳、垂れ乳、そして垂れ乳……。

孫だろうか、保育園児もいるが、若すぎる。全然興奮しない。

「冴えないなあ。全くもって目の保養にならん」

3

辰夫が震災地から離れた町に来て数日。だんだん幽霊やってるのに飽きてきた。腹はへらないが、食べる楽しみがないのは辛いものだ。

ある夜、りんご湯からの帰り、宙に浮きながらぶらぶらしていると、前を歩いていた男が公園に入る。

こんな時間に怪しいなと思い、辰夫は、跡をつけると、男は、木に縄をくくり、ベンチの上に乗っている。まさか。首吊り自殺か。

辰夫は、しかし実体のない幽霊野郎である。手を下すことができない。

仕方ないので、胸のボタンをオフからオンにした。

すると、男の前に現れる辰夫の姿。

「ひっおばけっ」

男は驚いてベンチから転がり落ちた。

二人がベンチに並んで話し込む。

「そうですか。震災で幽霊に」

「あなたはなぜ自殺しよう」と

「ぼく、塾に勤務してるんですけど非正規講師なんです。不況の影響で生徒数が激減してしまい、生活が立ちいかなくなって……」

辰夫も生前は非正規労働者だったから気持ち解る。

「ちょっと待って」

辰夫は閻魔様にケータイで電話した。

「ふむ。そういうわけか。そうじゃな。今、被災地の復興に人手が不足しとる。給料は出ないが、住むところと三食がつくらしいぞ」

「それはいい！」

辰夫はそのことを話すと、男は大喜び。

「助かります！ 昨日から何も食べてないんです！」

男は辰夫の手を握ろうとして、スカッとすり抜ける。

「うふふ。オレ、実体ないもの」

「あははっ。本当に幽霊なんですねえ」

男が笑顔になってきたので、辰夫はほっとするが、男は被災地に行くまでの交通費がないと言う。

「任せておけ」

辰夫はお尻を出し、いぼ痔を押して、オフからオンにした。

「??????」

辰夫は男の手を握る。男はあれと思う。

「兄ちゃん。オレの背中に乗りな」

「う、うん」

辰夫は男をおんぶして、えいと地面を蹴る。

ぐんぐん上昇。そのまま時速50キロくらいで飛んで行く。

「すごいすごい。うひゃあ速い」

「振り落とされないように気をつけな」

男を乗せた辰夫航空はさらにスピードを上げた。

月にぶつかりそうになったので、月がよけたら、月は食べていたカップめんを下に落としてしまった。

「んもう。バカ！」

つづく(???)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6408r/>

東プリン大震災

2011年10月9日19時07分発行